

Barbey d' Aurevilly の réalisme と romanesque (1)

田中, 榮一

<https://doi.org/10.15017/2332649>

出版情報 : 文學研究. 81, pp.23-36, 1984-02-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

Barbey d'Aurevilly の réalisme と romanesque (I)

田 中 榮 一

I

“Romantique attardé” と称せられた Barbey d'Aurevilly の réalisme と romanesque の問題は、まず彼の小説、あるいは réalisme についての彼の思考を検討することから始めねばならないと考える。まず réalisme そのものに対する彼の考えを見よう。

Si, dans tout états de cause, la littérature systématique est la pire des littératures, que faut-il penser de celle-là qui pour système a le réalisme?¹⁾

とにかく、体系化した文学が最悪の文学であり、réalisme を体系として持つ文学も、その例に洩れないときめつけている。ある書物の持つ思考、その表明する思想、その精神に与える真実性の概念、こうしたものを réaliste たちは重要視しないとする。そして、

Peindre pour peindre, décrire pour décrire, voilà leur visée, une visée très courte, quand on l'entend eux.²⁾

表現のための表現、描写のための描写ということが、彼ら réaliste たちの目的であり、これこそ、ちやちな目標であるとする。

また別な個所では、近代の réaliste たちの想像力について言及し、その欠

除を批難し、réalisme に走るのも、実はこの想像力の欠落がその原因であると言う。また彼らのいう réalisme は全くその名に偽せず、「現実」を表現するには程遠いと批難している。

Mais malgré cette prétention et le nom qu'elle porte, le Réalisme ne peut jamais donner la réalité. La réalité est complexe; c'est une implication qu'il faut fouiller pour en démêler les mélanges et les profondeurs.³⁾

真の「現実」とは複雑なもので、種々の「矛盾」をふくむ。これを掘り下げ、深層を探り起さねばならない。しかるに réaliste たちは、何の撰択もせず、ある対象物から他の対象物へと、まるで子供のようにただその物の俗悪性のみをとらえ、何の目的もなく、構成の統一性もなく描くのみである。ここで Barbey d'Aurevilly は、réalisme と中国絵画とを比較している。この比較には疑問もあるが、彼の言うところを聞くと、中国絵画は線と面しか描かず、また影を無視しているとして、réalisme の平板さとの類似を指摘している。そしてこの平板さは、réaliste たちが自らの芸術の目的が「美」ではなくて、「表現の正確さ」にあることから由来しているとする。Ernest Feydeau の作品批評の中に次の文がある。

Mais nous avons à discuter la beauté de ses livres et le principe d'esthétique qui explique, selon lui, la beauté des œuvres, et selon nous, la beauté des siennes. Ce principe singulier... vous l'imaginiez-vous jamais?... C'est, nous dit-il, l'exactitude.⁴⁾

réaliste たちにとっては、「表現の正確さ」が「彼らのいう美」であると批難し、それは決して作品そのものの美ではなく、彼らの身勝手な「奇異なる原

理」であり、故に「想像力からくる美の欠除した」⁵⁾ 作品を生むとけなしている。またその手法は、取りも直さず「情報調査」的意味における「正確」さであり、対象物の描写、ないしは対象物把握の科学的、概念的な「正確さ」であるという。これに関して彼は Duranty の作品評において、この作家の作中人物を語らせる手法に言及し、「現実」的ならんとして時には「不正確」になっていることを批難し、こうした手法は、既に Laclos が “Les liaisons dangereuses” において、Cécile de Volanges の書簡に、より幼稚な印象を与える為に、わざと綴りを間違えて書いた例を引き、この手法が芸術に反する悪い手法であることを強調している。また E. de Goncourt の小説、“Les frères Zenganno” を評し、次のように批判する。

Son livre [...] n'est partout que de la plus épaisse, de la grossière matérialité. La matérialité y étouffe tout : la pensée, l'émotion, la passion, le drame et la vie!⁶⁾

すなわち、この書の到るところに matérialité があり、それが思想、感動、情熱、ドラマ、人生すべてを殺してしまっている。また、réaliste の「皮膚病」である描写が各頁に拡がり、更にその描写たるや、科学的ならんとして全く幼稚そのもので、愚か者でも見ることができ、描写可能な物質的描写である。それをこの著者は “naturalisme” と呼び、また「分析」と称している。これは Barbey d'Aurevilly が自らの芸術の本質とする、作品の「心的効果、またその生み出す感動」⁷⁾ とは全く相いれないものであろう。Barbey d'Aurevilly の尊重する作品のこうした “moralité” は、その作品の “sujet” にはなくて、作品の “forme” にあるとする。“Les Diaboliques” の作者は、力強い画家は全てを描きうるとし、彼らの描いたものは、“tragique” である場合、常に “morale” であり、「万物の恐怖」⁸⁾ を与えうると言う。その意味は、作家がいかなる “sujet” を取りあつかうにし、例えば悪徳を描くにし、読む者の

心を強く捕え、胸を打つものであれば、読む者は想像の主人公の轍を踏むことは決してないということである。そしてこうした例に“Fleurs du Mal”を挙げている。その反対の例としては、Flaubert や Duranty といった réaliste たちを挙げ、彼ら「観察者」たち、言い換えれば人間の欠点、悪徳の執拗な、そして殆どが外科医的な描写家は、人間精神に関する事実については、全く無関心な“sourds-muets”であると言う。”

Barbey d'Aurevilly の réaliste に対する攻撃は、Flaubert にまで及ぶ。彼の Flaubert に対する不当なまでの批判は周知の事実である。この二人の“Normands”は、René Dumesnil の言う如く、「この世では二人をより偉大ならしめたであろう友情を結ぶことができなかった」¹⁰⁾のである。事実この二人の作家は、その芸術に対する態度、思想により両極端に位置していた。そして1869年の“L'Éducation sentimentale”に対する評言は、正しく熾烈である。

C'est un esprit de sécheresse supérieure parmi les Secs, une intelligence toute en surface, n'ayant ni sentiment, ni passion, ni enthousiasme, ni idéal, ni aperçu, ni réflexion, ni profondeur, et d'un talent presque physique, [...]

Flaubert は感情も、情熱も、熱狂も、理想も、視野も、反省もない“Secs”な中でも特に sec な作家である。そして、次の如く俗悪性を批難する。

Le caractère principal du roman si malheureusement nommé de ce titre abstrait, pédagogique et pédant: *L'Éducation sentimentale*, est avant tout la vulgarité, [...] Le médiocre jeune homme dont ce livre est l'histoire est vulgaire, et tout autour de lui l'est comme lui, amis, maîtresses, société, sentiment, passion, —et de la plus navrante vulgarité.¹¹⁾

まず、小説のタイトルが抽象的であり 俗悪である。次に青年はもとより、それを取りまく友達、恋人、社会、感情、全て痛ましい程の 俗悪性を持つ。réaliste たちは、Flaubert は、俗悪性が事実この世に存在するのだからその俗悪性を描くのであるとするが、これは誤りである。

Mais c'est là l'erreur du Réalisme, de cette vile école, que de prendre perpétuellement *l'exactitude dans le rendu* pour le but de l'art, qui ne doit en avoir un: la Beauté, avec tous ses genres de beauté.¹²⁾

芸術の目的は、全てのジャンルの美を持った総合的な「美」であるはずなのに、Flaubert とその一派は、俗悪を美と見なしている。いか様に俗悪性を描いても、それは決して美化させうるものではない。先にも引用した “matérialiste” なる語がここでも顔を出している。

Je dis qu'il n'y a là qu'un livre matérialiste de fond, matérialiste de forme, matérialiste de sécheresse, un livre comme le matérialisme en fait et n'en peut pas faire d'autres, puisqu'il nie la moitié, au moins, de la créature humaine!¹³⁾

Flaubert のこの小説は唯物的な書であり、“forme” も “sécheresse” も唯物的で、matérialisme はこのような作品しか生み出し得ない。なぜなら、それは人間の少なくとも半分を否定しているからである、と言う。Barbey d'Aurevilly は “Madame Bavary” については、「Flaubert は未だ巨匠でなければ、将来それになりうる」素質と、「厳しいまでの独創性」とを認めていたのであるが、ここでは次のような銘碑を建てている。

Ci-gît qui sut faire *un* livre, mais qui ne sut pas en faire

deux!

Flaubert は既に老化し、明らかに枯れ上っている。彼の才能はもう新しくなることはない。彼は「無限」を蔑視した。そして「有限」が彼を殺した、とする。

確かに René Dumesnil の言う如く、Barbey d'Aurevilly の Flaubert に対する以上のような批評は不当であり、その筆力ゆえに「悪意」が過分に表出されていると考えられる。¹⁵⁾ しかしさすがに Flaubert が没すると、上記のような調子は変化した。“Bouvard et Pécuchet” に対する評言は、讚美とまでは行かないが、1857年の Flaubert に関する文¹⁶⁾ に見出される共感が再現される。即ち、ブルジョワジーに対する嫌悪と軽蔑への共感である。ここに R. Dumesnil はこの二人の作家のおそまきな和解を読み取ろうと努力している。しかし果して Barbey d'Aurevilly の対 Faubert 評は不当であったらうか？ Gisèle Corbière-Gille¹⁷⁾ も指摘しているように、その評言のある部分は当を得ていると考えられる。即ち、Flaubert は文章力にはめぐまれず、文体研摩に呻吟したということ。また想像力については、Flaubert は果して自ら小説の主題を切り開いていったであろうか？ 同時代の事件や古代歴史からその題材を得たではないか。“Salammbô” や “La Tentation de S^t-Antoine” は真の意味での「小説」と言えるであろうか？ Flaubert は自らに課した主義のため、実際に自己の才能を押し殺したのではないだろうか？ Barbey d'Aurevilly の評言は、時としては不当なまでに批判が強烈ではあったが、一方では Flaubert の才能の限界を正当に感知していたと考えられる。尚、当時の批評家においても、例えば Sainte-Beuve のように Flaubert の才能を低く評価した批評家もいたということを付言しておこう。

次に1884年に完成した Joséphin Péladan の三部作 “La Décadence latine” の第一巻 “Le Vice suprême” に付された Barbey d'Aurevilly の「序文」を検討する。J. Péladan はまず Barbey d'Aurevilly の讚美者のひとり

であった。そして完成した小説の序文を書くように願い出た。この「序文」には Balzac の想起がきき立って見られる。Barbey d'Aurevilly の Balzac に対する評言はのちに触れることにして、まずは「序文」の内容を見て行こう。

Parmi les romans dont nous sommes si impitoyablement criblés, à cette heure, en voici du moins un que je n'attendais pas et qui n'a pas le ton des autres! En voici un qui nous enlève avec puissance à la vulgarité des romans actuels qui abaissent la notion même du Roman et qui, si cela continue, finiront par l'avilir.¹⁸⁾

今日多量のつまらぬ小説に僻易しているわれわれのもとに、全く予期しなかった小説、他のものと全く調子の異なった小説が現れた。小説そのものの概念が下落させた小説の俗悪性からもわれわれを救ってくれた作品である、とまず最大の讃辞から始めている。以下には前述してきた論旨と同工異曲の, réalisme について、ひいては小説そのものの概念の展開が見られる。Péladan のこの小説は、当代の他の小説の持つ「俗悪性」が全くない作品である、とする。他の作品は idéal も moralité もない。ばかげた物語を延々とする。あるいは短くて手足を失ったような作品を生み出している。そしてこうした作品を一そう悪くしているものに、当時の知的悪である「分析」を挙げている。この近視眼的「分析」より生れた作品は“matérialisme”の刻印を持っている。またこうした「分析」は物事を全く私的側面からのみながめている。これは細心ならんとする弱少作家の視線である。当代はこうした微生物の蒐集者によって文学が占有されていると慨嘆する。そして「分析」の対極の「総合」によって文学の真の美が得られるとしている。

Je sais bien qu'on ne peut pas supprimer absolument la Syn-

thèse dans l'esprit humain sans tuer l'esprit humain lui-même,
〔...〕¹⁹⁾

この「総合」の精神を抹殺してしまえば、人間精神そのものを殺してしまうことになる。

〔...〕 le roman, c'est-à-dire la seule grande chose littéraire qui nous reste, l'épopée des sociétés qui croulent de civilisation et de vieillesse, et le dernier poème qui soit possible aux peuples exténués de poésie! ²⁰⁾

Barbey d'Aurevilly は小説こそ自分たちに残された最大の文学であり、文明と老化により崩れ去る社会の叙事詩であり、また詩を失った人民の最後の可能な詩であると言う。そしてこうした小説を書いたのが、Balzac である。Barbey d'Aurevilly は Balzac こそあらゆる時代の、あらゆる国の最大の小説家であるとする。そしてこの Balzac の“La Comédie humaine”を追って、Péladan はわれわれに巨大な一種族の「総合」を与えようとしている。

Mais après Balzac, quelques années de la plus foudroyante décadence pour la rapidité, ont élargi sa colossale synthèse, et cette colossale synthèse élargie que M. Joséphin Péladan a entrepris de nous donner à son tour... ²¹⁾

そして、この作家の中に世の風潮に立ち向うひとりの大胆な人物を見て取っている。

Il y a, en effet, une triple raison pour que le scandale soit la destinée des livres de M. Joséphin Péladan. L'auteur du *Vice*

suprême a en lui les trois choses les plus haïes du temps présent. Il a l'aristocratie, le catholicisme et l'originalité.²²⁾

Péladan の作品がもし世間の 冷い対応に 運命づけられているとすれば、彼の中にある三つの、当世が最も いみ嫌うものがその原因となるであろう。即ち、貴族性、カトリシズム、それに独創性とである、とする。そして何よりもこの独創性がそれを持たない人びとのひんしゅくを買うであろうと言う。

Les hommes, en effet, ne s'intéressent qu'à ceux qui leur ressemblent, et c'est la raison qui les fait s'émouvoir et se passionner aux œuvres dans lesquelles ils ont affaire à des hommes comme eux.²³⁾

つまり人間は自己に類似した人間にしか興味を示さないもので、そうした類似した人間が現れる作品にのみ感動し情熱を燃やすものである。だから作家の独創性が読者の想像力を刺戟する範囲内であれば、読者は作家について行けるが、超自然的な創造物を与えられた時には、読者の感動と共感の源は枯れてしまうのである。Barbey d'Aurevilly は、Péladan の小説の中に現れる超自然的な秘教的部分に対しては、やや不満を洩らしている。そしてこうした手法はやはり大胆にして危険な試みであるとして、Balzac の作品、“Séraphita”、“Peau de chagrin”、“Ursule Mirouet” を挙げ、これらの作品が読者の想像力をとらえるのは、主題ではなくて、細部の美しさにあり、これはやはり Balzac の天才のしからしめるところであるとしている。そして最後に Péladan にはその未来の作品の美と栄光に対して自己の才能の魔術以外の魔術は必要としないと述べている。この「序文」の中でも見られるような Balzac への讚美と尊敬の念は、Barbey d'Aurevilly の終生持ち続けたものであった。“Les Romanciers” の第一頁に、「この19世紀小説家のシリーズを始めるに当

って、近代の大文豪へ敬意を表して、Balzac の名前を冒頭に掲げたい。」⁽²⁴⁾と最大の讃辞を献じている。他の réaliste 作家たちに対する厳しい批判も、Balzac だけは例外であった。既に1850年以前より、Balzac に対しては讃美と尊敬の念を持っており、この点に関しては Sainte-Beuve よりも確かな嗅覚で、今日の Balzac の文学的地位を既に与えていたのである。彼の死の直後、1850年8月24日の記事において述べる。

La France et l'Europe ont perdu, cette semaine, l'une des plus hautes illustrations du XIX^e siècle. Nous ne sommes encore qu'en doive être la fin, les hommes comme M. de Balzac sont trop rares pour qu'on espère revoir un esprit de cette toute puissance d'ici longtemps.⁽²⁵⁾

フランスとヨーロッパとは、19世紀最大の知名の士を失った。今世紀はまだ半ばではあるが、たとえ今世紀末となっても、この全能の人間をわれわれは再び持つことはあるまい、と述べている。その後1876年に至る長い期間にわたり、随所で Balzac の讃美が見られる。Balzac を19世紀小説家の権化であり、ゲーテ、シェクスピアのいないフランスの代表作家であり、想像力、独創性、観察力、直観力、情熱などにおいてシェクスピアと比肩し、構成力にやや欠けるところがあるものの、やはり Balzac は偉大な画家、偉大な作家、偉大なモラリストであり、人間性格を創造する力と、それらを支配しながら対立させてゆく劇的な配合力を高度に持った作家であるとしている。更に、Balzac は自己の哲学に強固な基盤と、秩序、統一の観念を与え、常に自己の内に「真実のための芸術」という他の追従を許さない卓越した思想を持っているという。そして小説そのものを改革したことも高く評価している。Balzac 以前には roman individuel しか存在しなかったが、彼によって小説は roman social となった。

D'individuel, le roman fut social. Où il n'y avait que l'homme, on mit toute une société. De l'analyse on s'éleva jusqu'à la synthèse. Non pas qu'avant Balzac, il est vrai, les mœurs de l'époque à laquelle appartenaient les personnages d'un roman ne s'aperçussent bien à travers ces personnages... Mais Balzac élargit ce cadre étroit. Il donna de l'espace et de la profondeur à l'horizon. [...]²⁶⁾

上の引用文にも、先の Péladan への「序文」の中で見た“synthèse”という語が再見される。Balzac の偉大さは、やはりこの“synthèse”にあり、小説の地平に広がりや深さを与えたことにあった。

以上のような Balzac の評価を基盤にして、Barbey d'Aurevilly の réalisme、ひいては naturalisme に対する批判が生れたのである。あらゆる réalisme の発見が既に Balzac にはあった。Balzac は科学的ともいえる手法を人間性格の上に適応した。そしてそれだけではなく、réaliste たちが排除した想像力を十分に持ち合わせていたのである。この想像力と観察力、あるいは観察から出発してそれを想像力で補なう力量、これを Balzac は持っていた。ただこの観察力というのは、もちろん réaliste たちのいう「観察」ではない。即ち、現実の事こまかな研究ではなくて、いわば直観的な現実の認知なのである。そして、想像力がその現実の深みを増すのである。

さて総じて以上のような Balzac への評言は Barbey d'Aurevilly の批評の最良の例であるが、特に réaliste たちへの厳しい批評は、Jean de Beaulieu も言うように、「独断的な批評」²⁷⁾であった。自らの宗教的、政治的な信念に従った批評である。しかし、また一面から見れば、個性味豊かな批評であり、作家や作品を前にした時の激しい反応でもあった。それは「他の精神を通しての偉大な精神の航跡」²⁸⁾でもあり、またその批評が独断的で激しいものであったが故に、時としてはこのことが錯誤の原因となり、不当なものとさせる理由ともなったと言えるのではなからうか。Barbey d'Aurevilly の批評の独自性

は、彼自身の次の言葉によく表明されている。

[...] l'impersonnalité n'est qu'une rêverie et une prétention de l'esprit humain. Au sens strict et métaphysiquement exact des mots, il n'y a pas d'impersonnalité. On est toujours quelqu'un; on est donc toujours personnel.²⁹⁾

即ち、非個人的ということは、人間精神の夢想であり、自負である。その語の厳正な形而上的に正確な意味において、非個人的なるものは存在しない。人間誰しもひとりの人間であり、故に常に個性的なのである。ここに彼自身の批評の本質を読みとることができるであろう。自己の主義を、対象とする作品に当てる。このことから欠点の批評家といわれ、酷評の達人とさえ称せられた。それはともかく、Barbey d'Aurevilly の個性には強烈なものがあつたことは確かである。感受性豊かで貴族的な魂の持主である彼は、烈しく高貴な作品に引かれ、日常的平板な現実を嫌悪したのは当然である。また彼は独特の嗅覚と予見の感覚を持ち、しばしば「巫女」³⁰⁾ 的な役割を演じた。G. Corbière-Gille も指摘しているように、³¹⁾ Barbey d'Aurevilly の Balzac, Stendhal, Baudelaire, Huysmans らに対する優れた評論は、Flaubert や Hugo や Renan に対する厳しい批判を償って余りあると言わねばなるまい。

Jean de Beaulieu は上記のような Barbey d'Aurevilly の価値を認めたひとりであり、次のように述べている。

Ancun nom ne peut plus justement être mis à côté de celui de Balzac que celui de Barbey d'Aurevilly. Ils sont les deux écrivains les plus évocateurs de toute la littérature française du XIX^e siècle et même de toute littérature.³²⁾

Balzac の偉大な名前の傍に位置しうる名前は Barbey d'Aurevilly をおい

て他にない。二人はともに19世紀フランス文学、ひいては全文学の最も偉大な作家であるとしている。そしてやや過ぎた讃辞だと思われるが、結語として、この“Idéal”の破産した時代、知的、道徳的枯渇の時代に、この二人の泉に渇を癒やしにゆくがよいと述べている。さて以上見てきた Barbey d'Aurevilly の批評において、「独断的」と考えられる面も多々あった。この独断的と見られる評言の中には彼の裡にある矛盾を隠す武器がなかったであろうか。彼の評言は第一印象で決定される場合が多かったようである。彼の思考そのものが、より厳しさを求めてはいても、彼の魂を打つ作品に対してはその厳しさが乏しくなるのである。この矛盾はどこから来るのか。これはひいては彼の裡にある réalisme と idéalisme (この場合 romanesque と言ってもよいが)との葛藤ではなからうか。これらの問題は次稿にゆずりたいと思う。 (未完)

[注]

- (1) “Les Romanciers”, p. 228.
- (2) Ibid., p. 291.
- (3) “Voyageurs et Romanciers”, p. 22.
- (4) Ibid., p. 156.
- (5) “Le Roman contemporain”, p. 63.
- (6) Ibid., p. 64.
- (7) “Voyageurs et Romanciers”, p. 155.
- (8) Oeuvre complète, tome II. p. 1290. “Premier préface aux Diaboliques”.
- (9) “Les Romanciers”, p. 238.
- (10) “Les Cahiers aurevilliens, No. 3”, “G. Flaubert et B. d'Aurevilly” p. 56.
- (11) “Le Roman contemporain”. p. 96.
- (12) Ibid., p. 97.
- (13) Ibid., p. 105
- (14) Ibid.
- (15) “Les Cahiers aurevilliens No. 3”, pp. 56~57.
- (16) “Les Romanciers”, pp. 61~76.
- (17) Gisèle Corbière-Gille, “Barbey d'Aurevilly, critique littéraire”, pp. 204~208.
- (18) “Préface”, in “La Décadence latine”, p. VII. s. q. q. .
- (19) Ibid., p. VIII.
- (20) Ibid.

- (21) Ibid., p. IX.
- (22) Ibid.
- (23) Ibid., p. XVII.
- (24) "Les Romanciers", note pp. 1~2.
- (25) "Les Cahiers aurevilliens, No. 4." p. 9.
- (26) "Romanciers d'hier et d'avant-hier", pp. 272~273.
- (27) Jean de Beaulieu : "Barbey d'Aurevilly et Balzac", in "Les Cahiers aurevilliens, No. 4." p. 39.
- (28) Ibid.
- (29) "Les critiques ou les Juges jugés", p. 363, cité par G. Corbière-Gille, p. 76.
- (30) G. Corbière-Gille : "B. d'Aurevilly, critique littéraire", p. 284.
- (31) Ibid., pp. 284~285.
- (32) J. de Beaulieu : "Barbey d'Aurevilly et Balzac" in "Les Cahiers aurevilliens, No. 4.", p. 13.